



BRAIN and NERVE 71 (5) : 509-516, 2019

対談

異なり記念日

齋藤陽道 × 酒井邦嘉

はじめに

酒井 私は言語脳科学を中心に研究していて、手話の脳研究などをおし、言語の普遍性が音声と手話に共通することを明らかにしてきました。また、ろう者の方々とさまざまな問題を共有するようになりました。そのような中で、ご著書『異なり記念日』に出会い、陽道さんのとても感度の高い文章や写真の表現に感動して、「とにかくお会いして、お話をしてみたい」と強く思いました。先日、書評¹⁾を書きましたが、このように対談が実現して、とてもうれしく思っています。

齋藤 そう言っていただけで大変うれしいです。ぼくは20歳までは補聴器を付けて

生活していました。補聴器を外してからは手話や筆談を使ってコミュニケーションをとっています。そのような生き立ちや、写真家としての生活を送る中で感じたことをまとめたのが、この『異なり記念日』です。

違いに気づく感性

酒井 ご著書の中で特に印象的だったのは、「言葉」という文字の表記です。言語としての日本語を意味する場合には漢字の「言葉」を、それより広く「心」を含んだ場合にはひらがなの「ことば」を使い分けていますね。文字で表せない部分を含んだ大和言葉としての「ことば」が、いかにあたたかく、豊かなものであるか、改めて感じ入りました。



異なり記念日
齋藤陽道著。2018年7月刊。聴者の家族で育ったろう者である著者、ろう者の家族で育ったろう者の妻、その2人の間に生まれた聴者である子——異なる言語を持った3人の生活の中で生まれるさまざまな発見を描いたドキュメンタリー作品。

1881-6096/19/紙：¥800/電子：¥1,200/論文/JCOPY



写真家
齋藤陽道
氏

きこえとことばの教室
言語障害や聴覚障害の支援を必要とする生徒を対象に、その症状や程度に応じた個別指導を行う教室のこと。特別支援学級と通級指導教室（通常学級に在籍）の通称。

筆談トーク
1枚の紙に交互に質問と答えを書き込み、それをプロジェクターで拡大して参加者が見るといった齋藤陽道が考案した対談方法。これまでに、谷川俊太郎や吉本ばなな、伊藤亜紗、櫛野展正などさまざまな著名人との対話を重ねている。

一方で「コトバ」や「ココロ」などと書くとき、より「モノ」に近くなってしまうので、私は使わないようにしています。「人」についても同じで、「人」「ひと」「ヒト」の3通りありますが、私はできるだけ「人」や「人間」と書くようにしています。「ヒト」は、生物としての意味合いが強いですから、それ以外の文脈で使われると違和感を覚えます。「ひと」は新聞のコラムを連想してしまいますし。

このように日本語では、3つの表記で意味合いが変わることがありますから、言葉遣いの違いに気づく感性を持つことが大切ですね。

陽道さんにとって、文字はどのような存在なのでしょう。

齋藤 ぼくは小学生のとき、午前は普通校に行き、午後は週に2回、「きこえとことばの教室」に通っていました。ぼくの言葉との出会いは、ここで教わったひらがなが最初です。

発音の良し悪しが当時のぼくにとってのすべてだったので、自分は聞こえる人だと思おうとしていました。でもやっぱりぼくは聞こえない。相反する思いの中で、文字のひらがなははっきりとわかる。その確か

さがうれしかった。それがぼくにとっての文字ですね。

酒井 「言葉」の由来は、「事の端(ことのは)」— 物事の端 — であり、伝えたいことの一部しか表現できない、という説があります。それが「言の葉」に変わったらしい。このような大和言葉には、「言霊(ことだま)」のように、言葉自体に思いが投影されるといふ考えがあるのでしょうか。そして、文字を書くときにも、その筆遣いに「人となり」が表れるものですね。

ですから、陽道さんが始められた「筆談トーク」がとても面白いと思いました。吉本ばななさんや谷川俊太郎さんとも、既に筆談トークをされたそうですね。

齋藤 はい。吉本ばななさんのときはすごく緊張して、頭が真っ白になって言葉が出てこなくなった瞬間がありました。でも吉本さんは、ずっと黙ったまま待っていてくださいました。ようやく言葉を書くことができても、うまく表しきれないなあと思っていたのですが、そういった言い切れなかったことも全部すくい取ったうえでの答えをくださって。すごかったです。

谷川さんは、内容というよりも、書かれる文字の造形に魅了されました。漢字・ひらがな・カタカナといったバラバラなはずの文字がどれも同じもののように見えるんですね。それが目の前で次々に生まれるのが、不思議で面白かったです。

酒井 陽道さんはそのように筆談を得意としていらっしゃるようですが、ろう者の皆さんがそうだというわけではないですね。知り合いのろう者から、「ろう学校では筆談が禁止だった」という話を聞いたことがあります。その方は、高校生のときにはじめて筆談を知ったそうですが、筆談を使えば自分の意志を聴者(耳の聞こえる人)に伝えられるのに、なぜそれまで筆談を教えてもらえなかったのか、と大きなショックを受けたと話してくれました。

日本人なら誰でも筆談ができるはず、という思い込みは間違いです。駅やお店では、「筆談器」を置いてあるところも増えてきましたが、それで十分ではないのです。

手話通訳という自然な方法と比べれば、筆談は人工的な手段だということになりますから。

人工的とはいえ、「書く」という行為には、先ほどの谷川さんのようにその人となりが見れるものです。筆談によってその場を顧客と共有できる「筆談トーク」は、素晴らしいアイデアだと思います。

齋藤 文字の書き方に人格が見えますねえ。ぼくは中学卒業後に進学したろう学校で手話と出会いました。はじめはなかなか手話を身につけることができませんでした。専攻科に入ってから突然、手話がスルスルと身につきました。

酒井 何かきっかけがあったのでしょうか。

齋藤 「手で話す」と書いて「手話」ですが、ただ手を動かすだけではなく、非手指動作（表情やうなずき、視線など）を使って表現するものだと気づいたのがきっかけでした。

例えば、先ほどの「言の葉」の「葉」—この文字の意味を手話で伝えるときには、手で「葉」を表すだけではなく、身体で「幹」を表現する必要があります。葉を支える幹、それがより大切なんです。

『異なり記念日』にも書いたのですが、単語だけを覚えるのではなく、流れをまず受け止めることが大事です。手だけを見ると、きれぎれにしか理解できませんが、手や表情、たたずまいといったその人のゆらぎをすべて含めた流れとして見ると、不思議とわかってくるんです。

酒井 そのような流れのある手話は自然言語であり、日本では「日本手話」が使われています。日本手話は日本語とは異なる独立した言語だということを、多くの方に知ってもらわなければならないと思います。

その一方で、日本語に手話の単語を当てはめただけの「手指日本語」は言語学的に不完全であり、日本手話とはまったく異なります。英語の文で、単語だけ日本語に置き換えるようなものですから。

齋藤 そのように整理すると、ぼくは20歳の頃に「日本手話」を使い始めたということになりますね。

ぼくの通っていたろう学校では、日本手

東京大学大学院教授
酒井邦嘉 氏



話を使う生徒と、手指日本語を使う生徒がはっきりと分かれていて、だいたい同じ人数だったと思います。最初は、日本語に近い手指日本語のほうが使いやすく、日本手話はまるでわかりませんでした。手指日本語を使って会話しながらも、心の底では、表現の豊かな日本手話に魅かれていました。単語を置き換えるだけの手指日本語のほうが、日本語から手話の世界に入りやすいのは確かですが、そこで止まってしまうのはもったいない…。手指日本語からもう一歩先にある日本手話の魅力を知らしめたいとも思って書きました。

酒井 通訳の現場や、通訳士の資格試験であっても、日本手話と手指日本語が混在しているというのが現状です。陽道さんの言うとおり、両者には「何を言っているのかわからない」ほどの隔たりがありますから、通訳のミスマッチが生じれば、会話が成り立たないことになりますね。

しかし、日本手話は自然言語であり、手指日本語は**ビジン言語**です。両者を指して「手話は2つ」と捉えるのは誤りです。後者のみを取り上げて「手話は1つ」と主張するのも間違っています。

日本の英語教育でも、深刻な問題が顕在

日本手話

主に日本で用いられている自然言語としての（乳幼児が獲得できる）手話であり、日本語とは異なる独立した言語。日本語と同様に地域による方言があり、世代によっても表現に違いが見られる。その一方で、空間への指差しが特定の人物や場所を表すといった表現には、アメリカ手話などの共通性がある。

手指日本語

日本語を身につけた中途失聴者が用いることが多く、日本語の文に対して手話の単語を無理に当てはめるため、日本手話の文法性を失った不完全な**ビジン言語**である。「日本語対応手話」とも呼ばれるが、これは「手話」ではないため適切でない。

ビジン言語

多国籍の労働者や、現地人と貿易商人などのように、異なる言葉を話す人々同士が最低限の意思疎通を行うにあたり、代替単語の羅列などによって人為的に作られた混成人工言語。もとの言語の文法性や意味概念の大部分が欠落しており、個別言語の構造を保持していない。

化してきています。英語の早期教育が注目され、小学校、さらには幼稚園や保育園でも英語を教えようとしています。そのほとんどがアルファベットや英単語の学習に限られているのです。どんなに単語や文字を覚えても、英語の文を正しく生み出すことは不可能なのですが。

「言葉を覚えるにはまず文字や単語から」という根強い誤解に基づく教育が、そのまま手話の習得にも現れています。日本語の五十音を対応させた「指文字」を覚えれば、とりあえず手話になる、と誤解している人も多いことでしょう。

ろう学校で、日本手話のわからない生徒が半数もいるという現実には、私は強い危機感を覚えます。そもそも、ろう学校の教員で日本手話を使える人はごく少数でした。しかも、「特別支援学校」への統合化によって、手話を身につけた専任教員はさらに減ることでしょう。手話を必要としない生徒のほうが圧倒的に多いのですから。

そうした現状をなんとか打開したいと考えていて、私の所属する学会議の「科学と日本語分科会」から、ろう教育に対する提言²⁾を出したところです。

「易しい、難しい」から 「自然、不自然」への転換

齋藤 ろう学校のことを話していて「日本手話を身につければ、もっと自分にふさわしい表現ができるはず」という予感のようなものがあつたのを思い出しました。日本手話は人間の身体に近いところから生まれてきたものだという実感があります。

酒井 その感覚は、実は脳に原因があるのでしょうか。自分の気持ちや考えを自然に言語として表現できる仕組みは脳にあり、それがまさに生得的な言語機能なのです。そのあたりのことは、『チョムスキーと言語脳科学』³⁾に書きました。

齋藤 日本手話は自然であるということに加えて、表情や身体、周囲の空間や時間も含んでいますね。言葉にすると一見難しそうですが、一度実感してみると深い感動が

あるんですよ。文字どおり、自分の身体と結び付いた自然なことばで伝えられる。そんな日本手話に魅かれていったんだと思います。

それに対して手指日本語は、動きが直線的で流れや抑揚がありません。はじめは手の動きだけで表現できるので手指日本語のほうが易しいと思いついて使っていましたが、もう日本手話からは戻れないですね。

酒井 手指日本語が「直線的」だというのは言い得て妙ですね。単語が一行に並んだだけ（線形順序と呼ばれる³⁾)で、言語としての構造を成していないわけですから。

それから、教育者や学習者は、「易しい、難しい」という視点から、できるだけ易しく身につけて効率のよい方法を選ぼうとしがちです。しかし言語の構造は人間がつくったものではなく、自然法則に従っています。ですから、よりよい方法を選ぶには、「自然、不自然」という見方に転換する必要があります。

齋藤 ぼくの息子は聴者で、3歳になったばかりです。ぼくと妻が日本手話で会話しているのを、彼は日常的に見ているので、それを真似て日本手話で話すようになってきました。とても細かい表現まで真似ていて、そんなにも深いところまで見ているんだと日々感動しています。例えば、目の動きとか首の動きとか、身体のちょっとした動きや、リズム・テンポとかそういったものも見事に再現しているんです。難しいはずの表現なのになと思っていたんですが、彼にとっては難しいほうがより自然で楽しいものなのかな。

酒井 それがまさに自然習得です。自然なものだからこそ、赤ちゃんでも無理なく獲得できるのです。大人が考える、難度や効率といった基準は正しくないのです。この視点を変えない限り、言葉の教育は「訓練」に成り下がってしまい、歪んだ形で進んでしまうのではないかと危惧しています。

この『異なり記念日』は、そうしたことが日本で初めて浮き彫りになった作品ではないでしょうか。

齋藤 わ～、うれしいです。

酒井 陽道さんが手指日本語と日本手話の両方を体験していらしたことが、陽道さんの奥さまが日本手話を母語としていらしたこと、そして、そのお二人から生まれたお子さんが聴者であり、日本語と日本手話のバイリンガルとして自然に育っているということ。その「異なり」の見事な調和が、ノンフィクションとして感動的に描かれています。

見えない「声」

酒井 陽道さんの『声めぐり』⁴⁾という本の中にこんな一節がありました—「ぼくが思う写真の面白さは、思いもよらない形で含まれたそのズレこそが、作者自身に世界の新しい気づきを還元することにある」(p.58)

写真家は意図したとおりの被写体や構図などをコントロールして、撮ることに集中するものだ、と思っていましたが、むしろ、その期待を裏切ったときに大きな発見があるのです。そのあたりを率直にお書きになっているのが印象的でした。

齋藤 『声めぐり』を書くうえで大切にされたことは、自分の持つイメージからズレたものが写る写真の良さでした。ズレてしまった「わからなさ」にこそ、新しい関わり方を教えてくれる「声」があるという気づきを写真から得ました。写真を撮りはじめたときにはわからないことをただ苦しいと思っていましたが、この点に気づいてからは、わからないからこそ楽しいと思えるようになりました。

酒井 先ほどの手話の話とよく似ていますね。難しそうな表現なのに、自然体で理にかなっている。自然体で撮るからこそ、「あっ、面白い」という純粋な発見がある。そこに自然と感動が生まれます。

『それでも それでも それでも』⁵⁾という本の中にある「ブルベリゴン」(p.93)も面白いですね(写真1)。ブルーベリーのジェラートが恐竜に見えてくる。

齋藤 本当は見えるはずなのに普段はよく見ていない。だから、「見過ごしているも



写真1 ブルベリゴン(文献⁵⁾を撮影)

のをもっと見たい」という気持ちをいつも大切にしています。自分が抱いている気持ちや感覚、つまり、「心」に近いものを選ぶかどうかが大切だと思っています。

酒井 写真にはそうした写真家の「心」が映し出されるのです。

それから『写訳 春と修羅』⁶⁾という本もいいですね。宮沢賢治の世界を絵で表現した作品はありますが、それを写真で表現するというのは、とてもユニークな試みだと思います。

齋藤 この本を出版することになったきっかけは、ぼくの写真を見た担当編集者の「宮沢賢治に通じる何かがある」という言葉でした。それで宮沢賢治の本を実際に読み、ゆかりの地、岩手県の遠野へ赴き、写真を撮りました。宮沢賢治が見えないものを大切にする人であり、傷ついても、弱さの中に強さを知っている人間だということを知り、そこを大事にしながら編みました。

酒井 宮沢賢治が好んで使った「すきとほった」という表現にも、その人となりが見えていますね。

言語が習得できないということ

酒井 ところで陽道さんは何歳から補聴器を付けられたのですか。

齋藤 3歳のときに聞こえないことがわかり、ボックス型の補聴器を付けました。ス

声めぐり

齋藤陽道著。『異なり記念日』と同時に発行されたエッセイ集。補聴器を付け、発声訓練を繰り返していた少年時代、「世界」は閉ざされていた。手話という声、プロレスの格闘という声、写真という声—さまざまな声にめぐり合うことで「世界」が徐々に開かれていく。

それでも それでも それでも

齋藤陽道著。2017年8月刊。著者が言葉と写真で綴った初めてのエッセイ集。先入観を持たず、価値判断をせず、素朴に写真を見る。写真に言葉が当て込みそうになるが「それでも」と我慢をする。そうして写真と向き合うことで、眼に見えるだけのものの奥にある声に出会う。

写訳 春と修羅

2015年2月刊。宮沢賢治の詩の世界を齋藤陽道が写真で翻案した書。「序」「春と修羅」「告別」「眼にて云ふ」の4篇の写訳に加え、賢治のゆかりの地である遠野を中心に撮影した写真群が収録されている。



写真2 補聴器の聞こえ方

人工内耳

聴覚を補うための医療器具。手術により、受信装置を耳の奥へ、電極を蝸牛へ埋め込む。マイクで拾った音を電気信号に変え、その信号は受信装置で受け取られた後、電極を介して残存する聴神経へ伝達される。聞こえ方は千差万別であり、音声の聞き取り訓練が必要である。

イヤッチを入れた瞬間、「痛っ！」と感じたことをうっすらと覚えています。きこえとことばの教室で補聴器を付けて発声・発語の訓練をしていましたが、通っている間は「イヤだな」と思っていました。

それから小学校は普通校に入学するのですが、ぼくの発語ではなかなか話が通じなくて「今までの発声の訓練はなんだったんだろう」と、小学校に入ってほとんどすぐに自信を喪失しました。その喪失感と挫折感、学校に通っている間ずっとありました。

1、2年生の間は、「きっと3年生になれば通じるはず」と夢見ていましたが、3年生のクラス替えで、それまで徐々に慣れてきた音の環境がリセットされてしまい、また話が通じなくなるという経験をしました。5年生でもまたクラス替えがあり、その繰り返しでした。

同級生にも先生にもなかなかぼくの発音をわかってもらえず、小学校6年間はそういう悲しい記憶として残っています。中学校に入ると、さらに周りの友だちの話の内容も勉強も難しくなり、その3年間はさらに苦しかったです。

補聴器の聞こえ方というのは、ぼくの場合はこんな感じです。例えば、「おはよう」という言葉が、いろんな雑音の中の向こうのほうにかすかにある(写真2)ように聞こえます。いろんな音の中から、聞くべき声を見つけていくのは大変なことでした。

「おはよう」もわからないくらいですか

ら、勉強の内容となるともっとわかりません。このまま聴者社会にはよい方向に向かうはずがないと怖くなり、高校からろう学校に入りました。

それまではずっと聴者の世界にいて、自分は聞こえる側の人間だという思い込みがあったので、ろう学校のことを内心、侮っていました。でも実際に手話に接してみて、声が見えるかのように言葉が理解できるということに、心から感動しました。そこから日本手話を身につけはじめて、20歳になったときに「自分の身体に戻ることができた」と思えるようになって、補聴器の使用を止めました。

酒井 補聴器や人工内耳の技術が日進月歩だとはいえ、ろう者一人ひとりの聴覚障害と複合したときに、音声がいかにも不自然に聞こえるかは、想像に難しくありません。

その状態を適切に評価できるのは本人だけですし、もしその人の言語能力が不十分なら、周りはもちろん、本人も評価できないことでしょう。陽道さんのように十全な手話を身につけてはじめて、補聴器や人工内耳の効果を客観的に評価できるようになるのです。そうした想像力が、聴者の側に欠けているのではないのでしょうか。

陽道さんが補聴器を付けたときに感じられた痛みは、説明できそうです。人間の感覚は、五感の違いを問わず、度を超すと「痛み」という危険信号として認識されます。大きな音のノイズが突然入ってきたときも、痛いと感じることになるでしょう。聴者にとっては、すぐ近くで爆発音がしたときや頭のすぐ上をジェット機が通過したときのような感じでしょう。

齋藤 その話を聞いて気づきましたが、小学校の低学年から学年が上がるにつれて、「音」から「ノイズ」に変わっていったんです。

聞こえ方は変わっていないはずなのですが、幼年期は補聴器をとおして聞こえるものをそれほど嫌なものとして感じていなかったと思います。それは純粋な「音」だったはずなのに、年齢が上がってディスコミュニケーションが増えるにつれ、「音」が、

やかましいだけの「ノイズ」になっていきました。

酒井 それは、先ほどの言葉が通じないという体験と重なって、ノイズの受け止め方が変わっていったのかもしれないですね。

マンションや近隣の騒音もそうですが、気になり出すと、ますますその音が聞こえるようになって、ストレスを強く感じてしまうようなものです。補聴器や人工内耳の装着が生涯にわたって問題を引き起こす可能性があるということを、医療従事者や保護者も知らなくてはなりません。

先ほどこがかった、クラス替えによってリセットがかかるという話は、学習経験による「音素修復」が関係していると思います。ノイズがあるために「×#♪○～？」という音にしか聞こえていなくても、「今日は天気がいいですね」と言っていることが経験から理解できれば、欠けた音素をノイズで修復して、もとの音声为正しく聞こえるようになるわけです。同じクラスで現れる特定の言い回しをいったん学習してしまえば、後は楽になるのですが、クラス替えで話者が変わると、この学習を一から始めないといけません。

人工内耳の装着後に必要な言語訓練の過程でも、これと同様のことが起こっているのでしょうか。学習によって特定の音声認識できるようになっても、周波数帯の異なる話者や、まったく異なる話題になったとたんに、聞こえなくなってしまうおそれがあるわけです。

医療従事者は、当事者や保護者に対し、手話を自然習得するというオプションをまず提示して、それから補聴器や人工内耳の使用がよりよく活用できるかどうかを、選択肢の1つとして吟味してもらうようにすることが望ましいのです。

聴覚障害への医学的介入が、本人の言語獲得を損なう可能性もあるということを、医療従事者は忘れてはならないと思います。

齋藤 人工内耳を使っている知り合いの中には、相手との会話は通じているはずなのに、その内容がどこかでズレているんじゃないかという違和感が拭えず、悩んでいる

人がいます。ぼくも補聴器を付けているとき、同じように感じていました。それでも20歳になるまで補聴器を付けていたのは、「わからないことはダメなことだ」と思い込んで、「できるだけ普通でいなければならない」というプレッシャーがあったからだと思っています。

でも、補聴器を外して、写真を撮りはじめて、「わからない」ことが怖いものではないと本当に知ったとき、ついに自分の身体を取り戻せたという実感がありました。「わからなさ」や「異なり」を、恐れるばかりではなく、もっとやわらかい姿勢で受け入れようとする姿勢が必要だと感じています。

酒井 とても力強いメッセージですね。

異なり記念日

齋藤 異なることはどうかしようとするものではなく、異なりの溝はそのままに、そこを超えて関わろうとするとき、新しい声が見えてくる。子どもに対しても親子であることに甘えず、異なりを見つめて、そこに対して「おめでとう！」と言えるような、そういう態度を伝えたいです。

高校生までは、「違うことは悲しいことだ」というイメージを持っていましたが、その認識を変えていきたいですね。ありふれた言い方ですが、違いをそのままにしつつ、そこを超えて関わり合う姿勢を持つ人が増えていくことを願っています。

酒井 これが『異なり記念日』の、いちばん大切なポイントですね。医学においては、「健常者にいかに近づけるか」という治療の理念や、聞こえる人と聞こえない人の隔たりをなくすというバリアフリーの発想に加えて、「異なり」を認めて互いを尊敬し合うという第三の選択肢ということになるでしょう。

講演で手話の話をする時、決まって「手話は世界共通なのですか」という質問を受けます。自然言語は常に多様なのですから、手話も音声言語とまったく同じように多様です。お話をうかがって、その異なりを最大限に大事にしなくては、と強く思いました。

とても貴重な機会をいただき、本当に
ありがとうございました。今度一緒に筆談
トークをやりましょう！

後記：後日、齋藤陽道写真展「感動、」にて、お
二人の筆談トークが実現しました。

文献

- 1) 酒井邦嘉: 書評 — 異なり記念日. *Brain Nerve* **71**: 57, 2019
<https://webview.isho.jp/journal/detail/pdf/10.11477/mf.1416201216?searched=2> (最終閲覧日: 2019年4月16日)
- 2) 日本学会議 言語・文学委員会 科学と日本語分科会: 提言 — 音声言語及び手話言語の多様性の保存・活用とそのための環境整備
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t247-9.pdf> (最終閲覧日: 2019年4月16日)
- 3) 酒井邦嘉: チョムスキーと言語脳科学. 集英社インターナショナル, 東京, 2019
- 4) 齋藤陽道: 声めぐり. 晶文社, 東京, 2018
- 5) 齋藤陽道: それでも それでも それでも. ナナロク社, 東京, 2017
- 6) 齋藤陽道: 写訳 春と修羅. ナナロク社, 東京, 2015